

河出書房〈グリーン版〉の誕生

田 坂 憲 二

一

戦後日本において数多く出版された各種文学全集の中で、もつとも親しまれたものに河出書房の〈グリーン版〉と呼ばれるものがある。『世界文学全集』全一〇〇冊と『日本文学全集』全五二冊を刊行した。書目の選定から造本に至るまで極めて水準の高いもので、『世界文学全集』を例に取れば、一九五九年の刊行開始から重版をつづけ、約十年後には「二〇〇〇万読者に親しまれてきた河出のグリーン版^①」と称され、書目によつては一九九〇年代まで、四〇年近くも版を重ねた大変なロングセラーである。^②一時期は日本中の多くの公立図書館に所蔵され、今日でも、五

〇歳以上の日本人のほとんどが、あの清楚な緑色の装丁の本のことを鮮やかに思い出すことができるのではないか。戦後の日本人の文学や教養を考えると、また戦後の出版文化史を考える上で、抜きにしてはならない叢書である。

ところが、同じ河出書房の六〇年代を代表する文学全集の中でも、豪華版やカラー版とは違って、このグリーン版のみが『世界文学全集』と『日本文学全集』の刊行時期に大きなへだたりがある。さらにグリーン版と呼ばれるが、『世界文学全集』にはクリーム色表紙の異装版が存在するのである。なぜこのようなことが生じたのか、そもそもグリーン版という名称はいつ頃から使われるのか、これ

らの問題について考えてみたい。発行当時の事実関係を知る上で不可欠なものでありながら、散逸しがちな資料である、内容見本・帯・挟み込みのチラシ・月報などをできる限り活用しながら検討してみたい。

猶、本稿では河出書房新社の時代をも含めて、河出書房の社名で統一する。

二

一九六六年という年で輪切りにしてみると、六〇年代の河出書房の出版の特色が最も分かりやすい。この年河出書房は、三種類の『世界文学全集』を平行して刊行しているのである。グリーン版がダンテ『神曲』メイラー『アメリカの夢』など六冊、豪華版がショロホフ『静かなドン』ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』など一二冊、カラー版がトルストイ『戦争と平和』ミツチエル『風と共に去りぬ』など一二冊である。³⁾文学や文学全集が幅広い読者層を獲得していた六〇年代であっても、同じ世界文学全集の分野で、三つの全集を同時刊行というのは大変な冒険であろう。競合する企画であるから、当然共倒れの危険も伴うが、小（グリーン版、小B六判）、中（豪華版、四六判）、大（カラー版、菊判）と差異性を明確にした判型に象徴されているように、三種類の全集はそれぞれ固有の読

者を開拓し、結果的に河出書房の総合収益を大きく押し上げた。グリーン版がロングセラーであることは上述したが、豪華版は六四年に、カラー版はこの年六六年にそれぞれ第一回配本を中心に年間ベストセラーに食い込む健闘を見せている。この三種類こそが河出書房の文学全集の六〇年代の主力商品であった。今、日本文学全集も含めてこの三種類の全集の第一回配本を示してみると、次のようになる。

一九五九年一〇月 グリーン版『世界文学全集』

スタンダール『赤と黒』

一九六四年六月 豪華版『世界文学全集』

ミツチエル『風と共に去りぬ』

一九六五年六月 豪華版『日本文学全集』

与謝野晶子訳『源氏物語』

一九六六年一月 カラー版『世界文学全集』

トルストイ『戦争と平和』

一九六七年一月 カラー版『日本文学全集』

与謝野晶子訳『源氏物語』

一九六七年六月 グリーン版『日本文学全集』

夏目漱石『坊っちゃん』

下村湖人『次郎物語』

グリーン版を除けば、豪華版もカラー版も『世界文学全

『集』の刊行開始からちょうど一年後に、『日本文学全集』の第一回配本がなされていることが看取できよう。河出書房としては得意分野の『世界文学全集』を先行させ、一年後に姉妹版の『日本文学全集』を追いかけて刊行し、相乗効果で読者の掘り起こしを図ったと考えて良からう。刊行月まで完全に一致することから、巧みな計算に基づくものであるといえよう。それだけに『世界文学全集』から八年近く刊行が遅れるグリーン版の『日本文学全集』の持つ問題は大きいであろう。この刊行時期の懸隔にこそ、グリーン版の秘密を解く鍵があると思われる。

猶、世界と日本の文学全集をタイアップして刊行させる方式が、豪華版によって初めて確立されたのではないということを予め断っておきたい。豪華版が確立した方式なら、グリーン版の時点で、姉妹版の『日本文学全集』の着想に至らない可能性もあるからである。ところが、この方式を河出書房は十年以上前にすでに実行しているのである。一九五三、四年に平行して刊行された『世界文学名作全集』と『現代文学名作全集』がそれである。『現代文学』とは日本の作家であって、『日本文学名作全集』では収まりが悪いので、このような名称になったのであろう。『現代文学名作全集』の方は増巻されて最終的には全二五冊となったが、当初は共に全一一冊の企画で、冊数までびたり

と一致する。ただ一一冊の叢書では、存在感を出すのは苦しいであろう。そのために大正末期以来の世界文学の全集を網羅した『世界文学全集・内容総覧』（日外アソシエツ）からも、河出の『世界文学名作全集』は漏れている、この『総覧』は名称も冊数もよく似た『世界文学代表作全集』（大正一五年刊行開始、全一八冊）から始められているにも関わらず⁵。ともあれ、河出書房の『世界文学』『現代文学』の二つの叢書の内容・判型・造本は酷似し、世界と日本の文学全集を姉妹版として刊行することは、五〇年代前半にすでに実験済みであったのである。

判型・造本という点から言えば、今日グリーン版と呼ばれている『日本文学全集』と『世界文学全集』とは当然一致する。ところが両者の初版のものを比較してみると、刻印されている名称に微妙な差異がある。緑色の外函の下小口に当たる部分に、一方には「グリーン版日本文学全集」とあるのに対して、他方は「世界文学全集 第：回配本」とあるのみで「グリーン版」という名称はない。また帯にも一方が「グリーン版日本文学全集」と明示するのに対して、他方には「世界文学全集」「河出版世界文学全集」などと記されるのみである。すなわち、『世界文学全集』の初版時には「グリーン版」という名称はどこにも記されておらず、この名称は確立されていなかったのである。この

名称の確定の遅れが、実はグリーン版「日本文学全集」の刊行の遅れと関連するのである。『世界文学全集』の方は、刊行当初は「グリーン版」と呼ばれずに、代わりに「河出版」「小型版」「コンパクト版」などいくつかの略称が併用されていたのである。厳密を期すために、本稿もしばらくの間、グリーン版の名称を使用せず、小型版『世界文学全集』と呼ぶことにしよう。

三

ここでいささか時間を遡って、小型版『世界文学全集』に至る河出書房の動きを振り返っておこう。

一九四〇年河出書房は『新日本文学全集』の配本を開始する。戦前、日本において刊行された、最後の世界文学の全集である^⑥。前年には第二次世界大戦が勃発、翌年には太平洋戦争の開戦となるこの年に、河出書房は敢えて、世界文学の全集の刊行を開始した。世界の大部分の国から乖離し、孤立化を歩む日本において、せめて世界につながる文化の窓を開け放そうとした観がある。四六判五〇〇ページ平均で、全二四冊の予定であった。完結は四三年、既に戦争は熾烈の度を極めていた。並製の普及版（一円八〇銭）と、箱入り上製の特製版（二円二〇銭）がある。

戦後いちはやく、世界文学全集類の復活への道を開いた

のもやはり河出書房で、終戦からちょうど三年目に当たる一九四八年八月から、『世界文学全集』（第一期、十九世紀篇）シリーズの刊行を開始している。戦争を挟んで、世界文学への灯火を守り続けたと言えようか。上製本函入りの特製版（三〇〇円）と、箱無しの普及版（二〇〇円、二二〇円）がある。外箱や奥付には、単に『世界文学全集』と記されるだけであるが、背表紙には朱文字で「世界文学全集（十九世紀篇）」と刻され、月報としおりにはともに「第一期」「十九世紀篇」と記されている。第一期は全四〇冊が刊行され、このあと、第二期として『古典篇』が、第三期として『十九世紀続篇』が続き、総計八八冊の大シリーズの予定であったが、一部未刊行に終わった巻がある。

このシリーズから一部の巻冊を抜き出して、装丁を改め別シリーズとした異名異装版が二つある。一つは『世界文学豪華選』で、表紙・箱などの装丁をやや豪華なものに改め、口絵を差し替え、元シリーズにはなかった挿絵も入れたが、五二年当時で五〇〇円という高めの価格設定は販売に苦慮したかもしれない。全一〇冊が刊行された。

前者とは逆に、普及版として装丁を改めたものが、『学生版 世界文学全集』である。定価一八〇円と『豪華選』の半額以下の価格で、元版の『十九世紀篇』の普及版の刊

行時よりも安い値段設定である。この時点で並製の四六版の文学書で一八〇円というのは、思い切った低価格である。当時の帯には「創業70周年記念出版」と記されていた。良書の普及を意図した「学生版」という名称の付け方も巧みである。全一八冊が刊行された。

このように、河出の『世界文学全集』は古典から十九世紀までを網羅した大規模な全集で、異装版を次々と刊行したのも、この叢書が好評裡に迎えられたことを示している。戦後直ぐにこのような叢書をまとめた河出書房の出版文化史上の意義は特筆すべきであろう。

ただ早くも強力な競争相手が後から追い上げてきていた。円本時代に最初の『世界文学全集』を刊行してこの市場を席卷した新潮社が、河出の全集では手薄であった二〇世紀の文学に焦点を絞り、当時の読者の渴望を満たすべく刊行したのが『現代世界文学全集』である。ロランの『ジャン・クリストフ』などを第一回配本として、ジョイス、ショーロホフ、ボーヴォワールなどの名作をずらりと並べ、圧倒的な存在感を示した。書目の選定がすぐれているだけでなく、装丁も洗練されていた。箱は簡素な紙箱だが、泰西名画をあしらったカバー装は瀟洒なもので、本文料紙も含めて河出の造本に差を付け、明らかに時代が変わったことを強く印象づけた。一九五二年からの刊行で、

当初二九冊の予定が最終的には四六冊となった。更に一九五七年からは、『新版世界文学全集』が刊行される。『現代世界文学全集』が大好評であったのを受けて、一九世紀の名作を中心にその追補を意図したものである。箱、装丁、造本など両シリーズはほぼ一致する。全二三冊が刊行され、最終回配本『チボー家の人々』の月報には「『現代世界文学全集』（中略）とあわせ、ここに十九世紀から現代までの世界の名作の集大成が完成」と自負する如く、両シリーズを併せると、最もバランスの取れた世界文学全集となった。二つのシリーズをつなげば、ロランにはじまってデュ・ガールで終わるわけで、戦後民主主義を象徴するような叢書であった。

新潮社のこの全集の衝撃は大きく、戦前からの翻訳文学の老舗で、戦後の早い時期に並装ながら『世界文学叢書』を刊行している三笠書房が、全く同じ『現代世界文学全集』というタイトルで参入をはかったことにも如実に示されている。

これに対して河出書房は、一九五三年から、上述した『世界文学名作全集』全一一冊の他に、『決定版 世界文学全集』全八〇冊の刊行を開始して対抗した。これまでの河出の世界文学全集は四六判二段組であったが、今回は菊判三段組で、決定版の名にふさわしい質量共に充実した全集

となった。造本も重厚で、恩地孝四郎の装丁も味わいのあるものである。一期から三期までに分けて刊行されたが、刊行途中の五七年に河出書房は一回目の倒産をしている。シェイクスピア、ボッカチオから、ミツチエル、レマルクまで、古典から現代まで幅広い編目であるが、別巻として『シャーロック・ホームズ全集』に三冊『水滸伝』に二冊を割り当てたのが注目される。同じ頃河出は、『万葉集』『源氏物語』から漱石・藤村の近代文学までを網羅した『日本国民文学全集』が好評で、この時も別巻として『大菩薩峠』『富士に立つ影』など大衆に人気のある作品を収載しているから、全く同じ方針であった。『決定版』が三八五円、『日本国民』の改装版が三六五円と、五円単位の価格設定も共通する。猶『決定版』は第一期が水色、二期は朱色、三期は緑色、別巻は薄紫色と、色違いの装丁が美しかったが、後一九六一年に装丁を改め箱も表紙も黒で統一した改装版を『特製豪華版世界文学全集』として刊行している。全八〇冊一括配本で揃定価四〇〇〇〇円であった。装丁者は、『日本国民文学全集』などを担当している原弘で、改装版に際して恩地から原への交代は、一つの時代を象徴しているようである。猶、原に関しては後述する。

このように新潮社や三笠書房の『現代』シリーズに大型化で対抗した河出書房であったが、今度は『現代日本文学

全集』で文学全集の市場に新境地を拓いた筑摩書房が世界文学の分野に参入、菊判の堂々たる『世界文学大系』を刊行するに至った。筑摩の大系は最終的には全一〇二冊となり、質量共に河出の『決定版』を凌駕した。その一方で、全集の小型化という新たなうねりが生じていた。一九五八年に平凡社の『世界名作全集』が先鞭を付けたもので、この叢書が出版界に与えた衝撃の大きさについては、紀田順一郎が的確にまとめている⁹⁾。平凡社の企画に追隨するものも多く、二年後の六〇年には新潮社が小型版の『世界文学全集』を、筑摩書房も『世界名作全集』を刊行している。この時いち早く反応したのが河出書房で、急遽全四八冊の小型版の全集を企画、五九年一〇月のスタンダード『赤と黒』を皮切りに、同年のうちに『罪と罰』『アンナ・カレーニナ』などの名作を相次いで刊行して、小型版の文学全集の主導権を握るに至るのである。自社の『決定版』より一〇〇円近く下げて、二九〇円という価格設定も効果を上げたであろうが、シェイクスピア、ゲーテからサルトル、魯迅に至る編目の充実と、これに加えて今日でも一頭地を抜く装丁のスマートさが、何よりも魅力的であった。

四

河出書房の小型版『世界文学全集』は、一九五九年全四

八冊の計画で出発したのだが、翌六〇年春には、これとは別に、全七冊の別巻の企画が発表される。別巻の第一回配本は、ミツチエルの『風と共に去りぬ』Iで、六〇年三月刊行、定価は二九〇円であった。別巻刊行に至った経緯は、挟み込みの月報に記されている。月報の八ページには、「世界文学全集別巻刊行にあたって」と題して、次のように記されている。

昨秋、小社は……コンパクト・サイズの世界文学全集全四十八巻を刊行して以来、全国の読者各位から絶大なご支持を得て、毎回ベストセラーとして、巻を重ねておりますが、……ここに世界文学全集の別巻として……「風と共に去りぬ」「大地」「レベッカ」「凱旋門」の四点（七冊）を、うすクリーム地表紙に朱と金の二色箔押しという豪華な装幀をこらして、刊行いたすことになりました。なにとぞ本巻とともにご愛読くださいますようお願い申し上げます。

同様の記述は、別巻刊行時に作成された内容見本にも見ることが出来る。この内容見本は、表紙に「河出版（黒字）世界文学全集（白抜き）別巻（赤字）」と記され、映画『風と共に去りぬ』の一場面をあしらったものである。ここに見られる「別巻刊行のことば」は、前記月報の文章とほぼ同様だが、「名作『風と共に去りぬ』『大地』『レ

ベッカ』『凱旋門』の四点（七冊）を、装幀に新趣向を加えて、刊行することになりました」と記されており、「装幀に新趣向」と強調されている点が注目される。造本に関する具体的な記述は、「別巻刊行規定」の「体裁」の項目に、「判型・造本 世界文学全集本巻と同じ。ただし表紙のみクリーム地に朱と金の二色箔押しの豪華な新装版」と記されている。

これらの記述から明らかなように、別巻の七冊は、すでに配本中の本巻とは同一判型・同一デザインながら、色違いの造本で刊行されたのである。全集としての統一性を同一デザインで追求し、他方で本巻・別巻の差異性を色違いで示そうとしたためと思われる。しかし別巻の色を「クリーム地」にしたことは、後に「グリーン版」と呼ばれるこの小型版のシリーズの、文字通り「カラー」が、当初はそれほど重要視されなかったことを示しているのではなからうか。

ところで、今日大学図書館、公立図書館などで所蔵されているこの小型版『世界文学全集』は、別巻も本巻同様に、グリーン地の物が圧倒的に多い。このクリーム地の別巻（以下白版別巻と適宜略称する）は古書店などで時折見かける程度である。当初はクリーム地の別巻であったが、のちには、本巻同様の緑色に統一されたのである。

では白版別巻はどれくらい出版されたのであろうか。これまでのにべ百冊以上の白版別巻を調べたが、そのほとんどすべてが、六〇年三月から十月に掛けて刊行された初版のものである。手許にある別巻七冊もすべて初版である。ただ白版別巻は初版のみかというところではない。いまだ調査の途中だが、初版以外に蒐集できた物で、発行年月が下るものとしては、「昭和36年5月30日6版発行」の『風と共に去りぬ』Ⅲ、「36年6月20日再版発行」の『大地』と、「35年7月12日初版発行 35年5月20日再版発行」と記す『レベッカ』などがある。『レベッカ』の方は初版と再版の日付が逆行するから、再版は「36年5月」の誤植であろう。現時点では一九六一年五、六月あたりが白版別巻の刊行時期の下限と考えている。『風と共に去りぬ』をのぞけば他の別巻は再版までが白版ではないだろうか。恐らく、グリーン地の装丁の圧倒的な存在感や人気を受けて、別巻もかなり早い段階で、本巻と同色の装丁に戻したのではないかと思われる。因みに、白版別巻でも、外箱は本巻同様緑色で、同色同デザインである。

このように考えてくると、図書館などの公的機関に所蔵されている資料については、装丁者・装丁（色・デザイン）などを書誌情報として付加していく必要性も痛感される⁽¹⁰⁾ともあれ、現在我々が眼にする別巻のほとんどは、本巻同

様緑地の、典型的なグリーン版のものであるが、一時的にせよクリーム地の色違いの別巻が刊行されたことは重要であろう。そのことは「グリーン版」という名称の発生が遅れることを示唆するようである。

五

小型版『世界文学全集』が本巻・別巻ふくめて二〇冊近くになった一九六〇年七月、この『世界文学全集』の姉妹版とも言えるべき企画が姿を現した。緑色ではなく、鮮やかなワインカラーの『日本文学全集』全二五冊である。これは小型版『世界文学全集』と同判型で、同じビニールカバーを採用、デザインもよく似ており、形態的にも姉妹版という名にふさわしい。この『日本文学全集』の内容見本ではそのことをはっきりと標榜している。

この『日本文学全集』全二十五巻は、二〇〇〇年をこえる日本民族の文学的所産として、古代から現代までの古典・新古典を厳選して、手頃な形においてまとめた最初の統一的な全集であります。……幸いにも、小社刊行中の『世界文学全集』全四十八巻が好評をもって迎えられていますので、その姉妹版全集として、各家庭のリヴィング・ルームに、各職場の書棚に、各学校の図書館に備えられご愛読されることを心からお

願ひ申し上げます。(「刊行のことば」)

『日本文学全集』は「世界文学全集」の姉妹版である。デザインとしては、当然対(ついで)のものとして考えられるべきものであろう。姉はグリーンのアンサンブル、そこで妹にはどんな色が、と考えられたのがワイン・カラーのアンサンブルである。……『世界文学全集』はすでに読者の書棚では、グリーンのマッスをなしていることだろう。あの落ちついたグリーンのマッスに対して、鮮やかなワイン・カラーが一方から徐々に量を増してゆくさまを想像することは楽しい。(「装幀者のことば 原弘」)

河出書房はこの後『日本文学全集』という名前の叢書をいくつも刊行するから、弁別のためにこの二五冊の全集を、装丁者原弘のことばにならって「ワインカラー版」と呼ぶことにする。小型版『世界文学全集』の売れ行きが好調なので、相乗効果をねらって急遽姉妹版のワインカラー版『日本文学全集』を企画したのである。二節で述べたごとく、世界と日本の文学全集を平行して相互補完させることは、河出書房の定番のスタイルで、次の豪華版の時に完全に確立される。それにしても、小型版『世界文学全集』が刊行を開始して一年弱で、姉妹編の企画をまとめ上げた手際の良さは注目に値するが、実はワインカラー版の内容

は、先行する『日本文学全集』を母胎として手を加えたものであったから、作業は比較的容易であったのだらう。⁽¹⁾

ここで、これらの叢書の装丁に付いて考えてみよう。戦後を代表するブックデザイナー原弘の仕事の中でも、この小型版『世界文学全集』は最も良く知られたものである。そのあたりを白田捷治の言葉でまとめると次のようになる。

函から表紙までグリーン系で統一されたデザインからは、いまなおとても清新な印象を受ける。函を包んでいるのが、原が開発にかかわった「アングルカラー」と呼ばれる新感覚の用紙である。ベースとは異なる色の細かい繊維を漉きこんだ、横方向に溝が浅く走る感触の柔らかい用紙……全体は原らしい活字主体の構成であるが、決して単調に陥らない……表紙にかけた透明なビニールにも横方向に溝がリズムカルに入っている。これは明らかに外箱の用紙の溝に対応するものであるが、のつぺりとなりがちなビニールに陰影感を添えている。⁽¹²⁾

原弘の膨大な仕事は、大著『原弘 グラフィックデザインの源流』(平凡社、一九八五年)によってその概略を知ることができるが、そのうち「ブックデザイン」の業績

は、八九ページ以下にまとめられている。その中で見開きの一二四・一二五ページには、ワインカラー版『日本文学全集』第4巻『狭衣物語 他』と、グリーン版『日本文学全集』第25巻『人生劇場 青春篇 他』が、向き合うように並べられているのである。やはりこの二つは姉妹版として並べて味わうべきものであった。原弘はこのころ文学全集関係の装丁を精力的にこなしている。既述のごとく、河出書房関係ではグリーン版やワインカラー版以外にも『特製豪華版世界文学全集』や『日本文学全集』があった。これ以外の主要なものだけでも、戦後の日本文学全集の先駆けとなった角川書店『昭和文学全集』や『現代国民文学全集』、講談社『長編小説全集』（六一年）がある。講談社ではその後も『現代長編文学全集』（六八年）『日本現代文学全集』豪華版（六九年）『われらの文学』デラックス版（同）があり、上述した平凡社の『世界名作全集』もまた原の仕事であった。戦後における文学全集の普及を考えると、装丁家原弘の果たした役割は極めて大きい。

ちなみに、「戦後の原弘像」に大きく比重を掛けた今日の評価に対して、戦前の原の活動やその周辺を明らかにする多川精一¹³や川畑直道の仕事は極めて貴重であり、なかでも川畑の大著『原弘と「僕達の新活版術」¹⁴』は瞠目すべき仕事であるといえよう。その川畑の著述の序として記され

た「原弘への視座」では「通称『グリーン版』と呼ばれる河出書房新社の『世界文学全集』」がやはり原の代表的な装丁作品の一つとして言及されている。

六

さて今日我々がグリーン版と呼んでいる河出書房の『世界文学全集』は、当初からの名称ではなかった。刊行当初はどう呼ばれていたかという点、固定的な名称はなく、単純に「世界文学全集」と呼ばれるか、そうでなければ「河出版 世界文学全集」「小型版 世界文学全集」「コンパクト版 世界文学全集」などと様々な呼ばれ方をしていた。

名称は同種のものとの差異性を強く認識させるものであるから、当初は社名を冠した「河出版」という言い方が最も多いようである。長期間にわたって帯に使用されたのもこの名称である。同時に、三節で述べたごとく、全集の小型化という時代背景があったから「小型版」「コンパクト版」という名称も使用された。挟み込みチラシの新刊案内などでは、文字数が制限されるから、「小型版」の名称が使われることがほとんどであった。対して、内容見本では、印象的な「コンパクト版」という言い方がなされた。今、この小型版のいくつかの内容見本を見てみると、〈第一集別巻〉〈第一集完結記念〉の際のものでは「コンパクト

ト・サイズ」と記され、《第二集》の内容見本では「コンパクト版」と記述されている。「グリーン版」の呼称は、第二集が完結した段階でもなお使われた形跡がない。第三集の配本が始まって、挟み込みチラシでは六五年七月までは「小型版」と記されていた。管見に依れば、六五年八月の第九回配本「ゾラ」の案内で「グリーン版」の名前が初めて見え、以降この名称で統一されていく。最終的に全百巻になるグリーン版のシリーズはすでに約九〇冊を出し終えた段階であった。「グリーン版」の呼称は意外に遅い誕生であったのである。

上述のごとく、河出書房では前年六四年から「豪華版」という愛称を冠したシリーズの刊行を開始していた。自社の別シリーズと区別するためには、社名を冠した「河出版」では不適當である。「豪華版」は造本内容に関わる愛称であったから、「小型版」「コンパクト版」という判型に由来する名称もまた、並称するにはバランスが悪かろう。さらに、この翌年六六年正月から「カラー版」が刊行されるが、これも六五年夏頃には計画が進んでいただろうから、これらと並称するにふさわしい名称が模索されていたにちがいない。かくして造本の特徴を最も良く示している「グリーン版」という名称がたぐり寄せられたのである。

ただし、グリーン版という名称にすれば、ほぼ同じデザ

インながら、色違いの造本であったワインカラー版『日本文学全集』は、最早姉妹版とはいえなくなる。もともと「古代から現代までの古典・新古典を厳選⁽¹⁵⁾」という、ワインカラー版の方針は理想にあふれたものであったが、全二五巻中、古典が二三巻では営業上は苦戦したのではないか。古典離れが次第に進むとすれば、ワインカラー版の梃子入れや重版と言うことも余り意味がないであろう。かくしてワインカラー版を絶版にして、あらたに姉妹版のグリーン版『日本文学全集』を刊行するという方針が確立されたものと思われる。判型で小・中・大と、見事に棲み分けて見せた「グリーン版」「豪華版」「カラー版」であるから、小型サイズのグリーン版『日本文学全集』は、河出書房の全集の隊列に加えることが是非とも必要な叢書であった。しかも、グリーン版『世界文学全集』は順調に版を重ね、ロングセラーとして一つのブランド力を形成し始めていたと思われるから、河出としてもこの名称を極力利用したかったに違いない。

一方、河出書房は『日本文学全集』という名前の叢書では、古典の現代語訳と近代文学を兼備するという見識を持っていたが、それでも時代の流れには抗しきれず、ワインカラー版（二五冊のうち一二冊）、豪華版（五四冊のうち一〇冊）、カラー版（五七冊のうち七冊）と次第に古典

の比重を軽くしていった。⁽¹⁶⁾ 恐らく、他社のように近代文学のみの『日本文学全集』へと踏み切る機会を窺っていたであろう。二つのもくろみが一致し、河出書房としては、大ヒットしたグリーン版のイメージを利用して、更に清新な日本文学の全集の企画が進むことになった。

かくして六七年年六月の漱石・湖人の二冊同時配本を皮切りに、グリーン版『日本文学全集』の刊行が開始される。同時に河出は宣伝に吉永小百合を起用し、三万人に賞品が当たる「河出グリーンまつり」という大キャンペーンを開始した。グリーン版『日本文学全集』の内容は、定番の藤村・漱石・谷崎を重視したほか、『次郎物語』の全巻採録で下村湖人に二冊を割り当てたほか、武者小路実篤・山本有三・石坂洋次郎にも二冊を割いているのは、高校生あたりを主要読者と考えたのであろう。「若い読書家のための本格的な《普及版》」「これだけ読めば若い人の教養はOK」と、河出の意図は明確である。

このような経緯でグリーン版という名称は確定し、六七年には『日本文学全集』の刊行が開始された。河出書房としては、グリーン版のブランド力ということもあり、満を持するという気持ちであっただろう。ただ積極的に新しい企画を投入する方針は、当然過剰な設備投資となり、河出書房を次第にむしばみ始めていた。グリーン版『日本文学

全集』も救世主とはなれず、一〇冊程度を刊行した六八年春に河出書房は再度の経営危機に追い込まれる。所謂河出事件である。冒頭で述べたごとく、後には平成に至るまで版を重ねるグリーン版の神通力が衰えたわけではない。グリーン版のブランド力を以てしてもいかんともしがたい負の遺産の蓄積が六八年当時には、河出書房には存在していたと言えようか。

注

- (1) 一九七〇年頃に重版されたグリーン版世界文学全集に付けられていた緑色の小ぶりの帯、反対側には「古典から現代まで、世界文学の名作を完璧に網羅した永遠のライブラリー」と記される。手許の例で言えば『風と共に去りぬ』I II III 一九七〇年刊、各四四、四〇、四〇版に、この帯がある。
- (2) 手許の例を挙げれば、第二集第一三巻、ジェイムズ・ジョイス『ユリシイズ』I、一九六四年（昭和三九年）八月初版、九二年（平成四年）二月二五日二九版、二六〇〇円、同一四巻、同II、六四年一月初版、九二年六月三〇日二四版、同額、がある。
- (3) これ以外にこの年刊行されたものに、小B六判のカレッジ版『世界名作全集』がある。
- (4) 田坂「文学全集から見た河出事件の背景」『香椎潟』五一

号、二〇〇五年二月、参照

(5) 『現代文豪名作全集』の方は類書の『日本文学 全集・内容総覧』(日外アソシエーツ)に採録されている。

(6) 同年刊行開始のものに中央公論社『現代世界文学叢書』があるが、小規模なもので、書誌データも完備していないようである。『世界文学 全集・内容総覧』(日外アソシエーツ)では全九巻のうち三、五、七、八巻未確認とする。国会図書館のNDL-OPACでは二、四、五、七、一、一四巻のみが所蔵と出てくる。ただ手許には第一三巻『大飢餓』があるし、大学図書館では他の巻も所蔵されているようだ。

(7) 矢口進也『世界文学全集』トパーズ・プレス、一九九七年一〇月、ではこの二つの『現代世界文学全集』の関係を適切にまとめている。

(8) 一九五九年頃刊行された水色の堅牢な貼函入りのもの、奥付には「第二次」と記される。最も良く流布した五五年刊行の初版は鮮やかな朱色の紙函入りで三四〇円であった。

(9) 紀田順一郎『内容見本に見る出版昭和史』本の雑誌社、一九九二年五月。また矢口注(7)書もこの前後の分析にすぐれる。

(10) 年月が経つと初版・改装版の区別が付かなくなる。『講談社クロニク講談社の80年』では『傑作長篇小説全集』の第一期ではなく、第二期の異装版の写真が掲載される。田坂「講談社の『日本現代文学全集』とその前後」『香椎潟』五〇号、二〇〇四年一二月、参照。また装丁情報的重要性は「書誌情報」の充実と図書館博物館への道」『九州地区大学図書館協議会

誌』四六号、二〇〇四年二月、で述べた。

(11) 田坂「源氏物語」と『日本文学全集』―戦後『源氏物語』享受史一面―『源氏物語とその享受』武蔵野書院、二〇〇五年九月。

(12) 白田捷治『装幀時代』晶文社、一九九九年一〇月、二六ページ。

(13) 多川精一『太田英茂』EDI、一九九八年四月。『戦争のグラフィズム』平凡社、二〇〇〇年、初版は八八年。など。

(14) 川畑直道『原弘と「僕達の新活版術」活字・写真・印刷の一九三〇年代』トランスアート、二〇〇二年六月。

(15) 『日本文学全集』内容見本。

(16) 田坂注(11)論文。

(17) 『河出書房の新刊 67/5』「グリーン版の特色」。

付記

本稿は、日本出版学会二〇〇四年春季大会(於國學院大學)において発表したものを礎としている。席上ご教示賜った会員諸氏に感謝申し上げる。

脱稿後、『原弘 デザインの世紀』(平凡社、二〇〇五年六月)を見るを得た。原の作品と文章を見事に調和させ、同時に近代日本デザイン略史をも兼ねる好著である。